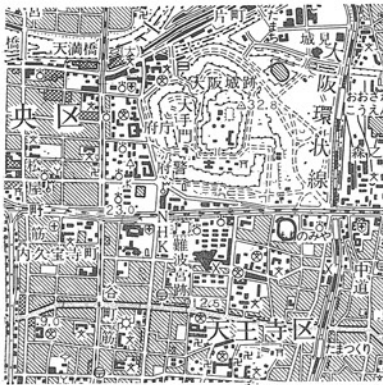


## 大阪・大坂城跡 (2)

- 1 所在地 大阪市中央区上町二丁目
- 2 調査期間 一九六八年(昭43)一〇月～一九六九年二月
- 3 発掘機関 大阪市教育局・難波宮址顕彰会
- 4 調査担当者 代表 山根徳太郎
- 5 遺跡の種類 宮殿跡、城郭・城下町跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

調査地は大坂城の南にある上二病院敷地である。難波宮の朝堂院南部のすぐ東で、前期難波宮朝堂院の南門から約一五〇m東方になる。近世になり大坂城が築かれると、広小路に面したこの辺りは、豊臣氏の頃は三の丸にとりこまれて武家屋敷地となり、徳川氏も武家屋敷地を踏襲するが、北の道路側の調査地は絵図でみるとおそくとも元禄の頃には町屋になっている。地



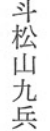
形は上町台地の背部の東寄りで、東・南にかなり急に傾斜している。敷地内は北西部の高所に合せて平坦にしているが、宮の中心部より三mほど低くなっている。




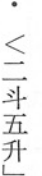

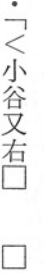

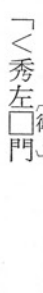
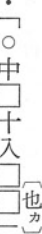
上二病院建設に先立つ難波宮跡第三二次調査で木簡が出土し、一九七八年には二期工事に伴う第一二八次調査を行なっている。約一三〇〇㎡の敷地は北西部から西部にかけて地山が高く、中央から南東部にはほぼ敷地いっばいに広がる窪地がある。恐らく自然地形であらう。窪地の埋土は二層あり、包含する土師器・須恵器・瓦などから下層は前期難波宮、上層は後期難波宮に関係するものとみられる。遺物には古墳時代の須恵器や埴輪もある。北西部の地山上には柱穴群があるが難波宮との関係は明らかでない。

窪地の埋土など包含層にトレンチをいれている時に木簡が見つかり、近世の土坑が敷地の北西寄りにあることがわかった。東西約一五m、南北約一〇mの楕円形で、窪地の縁に近い西・北辺では一・四～一・二mと崖状に落ちこんでいる。土坑内は基本層序として黒色粘土層の上に青灰色粘土層が堆積しており、部分的に植物層や砂層もみられる。土坑の底部には多量の遺物があつた。木簡のほか人形・箸・へら・曲物・桶・櫛・下駄・漆碗などの木製品、播鉢・唐津焼・瀬戸天目・土師器皿・焙烙などの陶磁器類、金箔押瓦を含む瓦類、金属製品、石製品、さらに貝・骨・種子・雑木などの動物遺体も多い。ごみ溜めのような状態で埋められている。

土坑及び出土遺物の年代について第三二次調査概要では「近世初頭の土坑」とし、漆椀は「江戸初期のもの」としている。しかし金箔押瓦や軒平瓦の文様は豊臣氏大坂城期のものである。現在大坂城跡の調査では、豊臣秀吉が天正十一年（一五八三）に大坂城築城を開始してから慶長二〇年（一六一五）大坂夏の陣によって落城するまでを豊臣氏大坂城期とし、それ以降を徳川氏大坂城期として区分している。「近世初頭」「江戸初期」は現段階ではどう位置づけられるか、瓦と陶磁器類を部分的にはあるが見直しをした。それによれば瓦の斜目糸切技法や土師器皿にも豊臣氏大坂城期の特徴がみられ、遺物の多くが同期に属すると考えられる。だが染付には中国製のほかに伊万里も認められるから、徳川氏大坂城期の遺物もわずかながら混じっているといえる。遺物の年代について、結論は埋土の検討も含めて本報告をまたねばならないが、基本的には瓦類・陶磁器類と同様であると考えてよいのではなかろうか。

## 8 木簡の积文・内容

- (1) ・「進上」  
  
 192×29×7 033
- (2) 「大豆斗松山九兵衛」  
  
 154×21×3 033
- (3) 「塩巻俵松山九兵衛」  
  
 168×26×3 033

- (4) ・「米五斗入林〔為カ〕介」  
  
 134×21×5 033
- (5) ・「林〔為カ〕介」  
  
 122×22×6 033
- (6) ・「武斗」  
  
 122×22×6 033
- (7) ・「二斗五升」  
  
 178×24×4 033
- (8) ・「小谷又右」  
  
 145×25×2 039
- (9) 「中白」  
  
 94×19×3 039
- (10) 「秀左〔衛カ〕門」  
  
 62×25×5 039
- (11) 「岩沢太右衛門 岩〔付カ〕」  
  
 225×26×3 051
- (12) ・「中〔也カ〕十入」  
  
 157×36×6 011

## (14) 「○左□八(花押)」

70×(51)×2 065

墨痕のあるものは二六点である。そのうち絵を描いたもの一点、点とか線だけが認められるもの四点で、文字の解説が難しいものが八点ある。二六点中一三点はパウ・シヨベルで掘り上げた土から見付けたもので、(1)(4)(7)(8)(9)(10)がそれである。頭部に切り込みを入れた荷札・付札木簡が一三点と多く、(1)(6)(9)には切り込みの紐の痕が残っている。長さが一五～六cmのもの一〇cm余りのものとがあり、長い(2)(3)が品名・数量・差出人を片面に書いているのに対して、短い(5)(6)は数量と人名を表と裏に分けて書いている。(6)は□介が受取人と差出人の両方考えられるが、(5)の林□介が差出人の可能性があるならば表と裏は逆になる。幾人かの人名がみられるが、(2)と(3)、(4)と(5)は同一人物の可能性がある。(8)の中白はナカジロと読めば矢羽の斑の一つで、チュウジロと読めば玄米を二割搗き程度に精白したもの、精糖の一種でやや不純物を含んで黄色味を帯びたもの、赤味噌と白味噌との中間の味噌をさすというが、後者チュウジロのいずれかであろう。大手前二丁目からも「中白四斗入……」木簡が出土している。(12)は薄い柱目の木簡で、文字の上部に木釘が残っていた。ほぼ同形同大の木簡がもう一点ある。

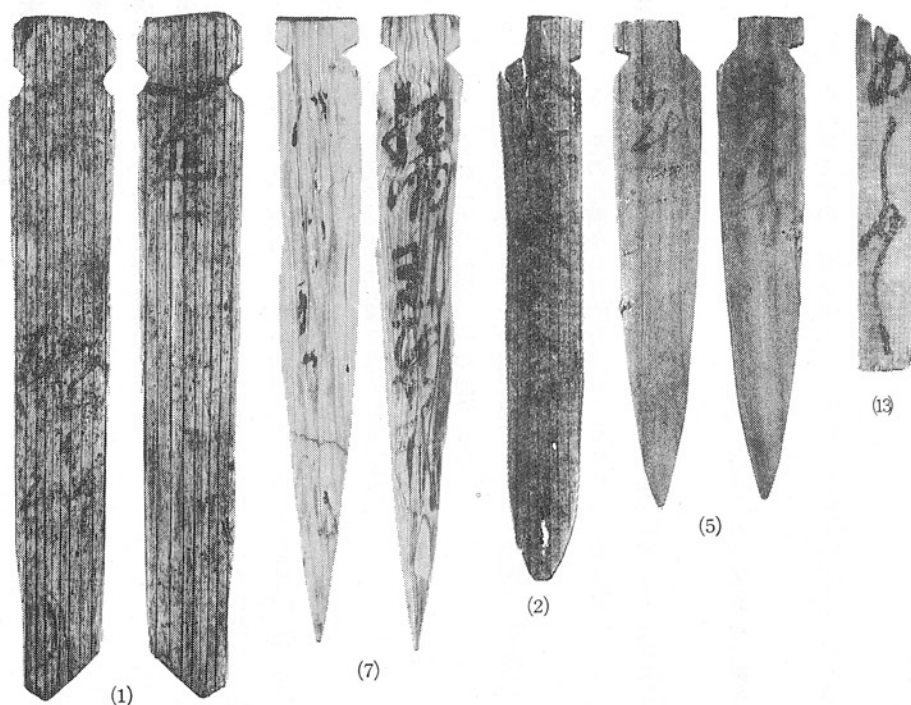
木簡の内容について多く記述できないのであるが、これらは近世

の木簡の出土例としては早く、二〇年余を経ているので現状を少し補足しておきたい。木簡類は現在乾燥した状態にある。木簡の乾燥は奈良国立文化財研究所で科学的に処理されたものと、ゆっくり時間をかけて自然乾燥させたものがある。後者は当時脱色剤を使っていないせいか大半の木簡が茶色或いは黒ずんで文字がみえにくくなっている。わずかな縮みがみられるもの、脆くなったものがある。また墨が退色してしまつて、出土時点での記録をみないと肉眼では墨痕が認められないものもある。一方科学的に処理をした木簡は脆弱さはなく、木材の色が淡くなつたせいか墨痕がより鮮かになっているものもある。例えば(7)とか(1)である。(7)は解説できていないが、文字を書いた後部分的に削られているようである。(1)は「進上」の下と裏面に淡い墨痕がある。書かれた時に先後があるのか。墨の残り具合の問題か検討を要するであろう。

木簡について、出土当時に林紀昭氏が解説・実測をされており、その後中川信作氏が釈読・計測をした資料があり、多くはそれによつた。また林氏には今回改めてご教示願つた。土師器皿はじめ陶磁器や瓦類の見直しは宮本佐知子氏にお願いした。深く感謝の意を表したい。なお、文責は八木にあることを記しておきたい。

## 9 関係文献

大阪市教育委員会「第三二次発掘調査概報」(『昭和四三年度(第三次・第三二次・第三三次)難波宮跡調査報告書』一九六九年)



榮原永遠男「現大阪城周辺出土の木簡」(追手門学院校地学術調査委員会『大坂城三の丸跡』一九八二年)

佐久間貴士「大阪・大坂城跡」(『木簡研究』一一一九八九年)

(八木久栄)

埋蔵文化財写真技術研究会編

『埋文写真研究』第二号

文化財写真の研究、技術、情報など、写真を撮る人だけでなく、写真を使って報告書を作る人、これを読んで情報を得る人まで、文化財調査に関わる人々に必携のマニュアル書。年刊で現在二号まで刊行されている(第一号は品切)。

B5判 カラー図版多数 一七〇頁

定価三〇〇〇円 送料四冊まで五〇〇円・五冊以上無料

申込先・〒六三〇奈良市二条町二一九一

奈良国立文化財研究所内

埋蔵文化財写真技術研究会 佃 幹雄 宛

TEL 〇七四二一三四一三九三一

郵便振替 京都五一九九三〇 埋蔵文化財写真技術研究会